

梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像

竹村則行

一 はじめ

白居易「長恨歌」や白樂『越國兩』の後を承けて、楊貴妃故事を情の主題の下に集大成した清・洪井の『長生殿』全五十詩中には、多様な楊貴妃像が描かれる。一方では、むろん「長恨歌」以来のロマン溢れる好ましい楊貴妃像を忠實に繼承しているものの、一方では、必ずしもそうではないヒステリックな楊貴妃像も併せ描かれる。中でも第十八「夜懲」・十九「懲闇」詩中に見える次の場面は、「悪女」楊貴妃を描いて、『長生殿』全五十詩中でも際立つて異色である。いま、梗概と引用とで簡単に紹介する事にする。

まず第十八詩「夜懲」では、玄宗の寵愛を一身に纏きつける事に成功したかに見えた楊貴妃であったが、ライベル梅妃への怨み言を述べ、再び復活した事を知り、楊貴妃が悶々として梅妃への怨み言を述べ、未明にも闕わらず、二人の密會の現場へ乗り込もうと皇巻へ場面がある。中に、次の如き楊貴妃の獨白があり、ライベル梅妃への感情的な憤慨が露わである。

奴家楊玉環、久しく聖眷を蒙り、愛もて君心を結ぶに、耐へ回し、梅精江采蘋、意相ひ下りるが、怡も好、聖上に觸忤ひければ、他をば楊東に置す。但だ恐る、采蘋の巧計、天を回ら

し、皇上の舊情未だ断えざるを。此に因つて常に自ら提防す。唉、江采蘋、江采蘋、是れ我の体を容れ得ざるに非ず。只だ怕る、我れ体を容るるか、你哉、我を容れ得ざらん。

續いて第十九詩「懲闇」には、玄宗と梅妃の密會の現場へ乗り込んだ楊貴妃が、四ざとく梅妃の鳳轎を見つけ、玄宗に激しく詰め寄る場面がある。當の玄宗はあくまで「口を切り、楊貴妃をなだめにかかる。(旦、看るを作す科) 瞳、通の楊底、是れ一隻の鳳轎ならずや。」(生、急き起き、掩はんと欲するを作す科) 那裡に在りや。(後より翠鉢を掉出する科) (旦、拾ひ看る科) 瞳、又是れ一采の翠鉢、此れ皆婦人の物なり。座下既に獨り寝むに、想ふぞ此れ有るを得んや。(生、差づるを作す科) 好に奇怪なり。這れは是れ那裡より來れる的ぞ。喜人すらも解せず。

やがて玄宗の心無い風趣に激昂した楊貴妃は、次の北水仙子調に寄せて、梅妃を激しく罵り、玄宗に切なく訴える。

【北水仙子】問ふ間と問ふ間と問ふ、華萼の嬌は、怕る怕る怕る、楊東の花の更に好きに似かざるを。有り有り有り有り、梅枝兒の曾て先春を占むるに、又た又た又た又た、何ぞ綠楊の垂繩るを用ひんや。(生) 女人の一點の眞心、難道妃子通は曉ひやるか。(旦) 請ふ請ふ請ふ請ふ、眞心の故交に向ひ、免よ免よ免よ免よ免よ、

人の怨みて妾を憎薄しと爲す。²³⁾

ここで楊貴妃は、一度は驅んじられたはずのライバル梅妃が再び玄宗の寵愛を受けている事を知り、激しい嫉妬心に駆られる。そして全く抑制が効かないまま、すさまじい劍幕で翠闇の密會現場に乗り込み、玄宗との間にあらぬもい派手な痴話喧嘩を開くに及ぶのである。また同じく第六鉢「傍説」には、虢國夫人との醜聞に絡んで、次の様に楊貴妃のきつい性格を描寫している。

(ヰ=高力士)「²⁴⁾昔趙に楊娘娘は、嬪妾の性、天生²⁵⁾才²⁶⁾利²⁷⁾者²⁸⁾し。前時は梅娘娘に遇得りて、直に樓東に遷置して奈²⁹⁾と³⁰⁾する無し。³¹⁾ところで、ここにあげた楊妃深くでナーベスな楊貴妃像は、周知の様に、從來「長恨歌」や「梧桐賦」を通してよく知られている清楚でロマンチックな楊貴妃像とは全く別人の趣がある。むろん、人間像は表象として常に多様性を持つものであり、この兩極端の楊貴妃像もその多様な人間像の忠實な表明だと考えられぬこともないが、問題はそれほど簡単ではない。どうの、圓頭に述べた「長生殿」における楊妃深くてナーベスな「悪女」楊貴妃像は、實は明らかに依據したと思われる故事典據が存在するからである。その故事の引用の仕方、及び「長生殿」全體の楊貴妃像との関連については、やはり『長生殿』研究の一環として十分な検討を要する課題である。

没後千二百餘年を経た今日まで、『美女』としての傳承が嬉しい楊貴妃について、冷嘲且つ批判的に描寫する文獻は、私見によれば、後述の陳鴻「長恨歌傳」が最初であるが、圓頭に述べた「長生殿」第十八・十九鉢の楊貴妃の直情徑行の行動は、實は楊貴妃批判を顕わにした南宋・閩名作の通行本「梅妃傳」に直接に出據する。

「梅妃傳」は楊貴妃のライバル梅妃を主役に仕立てて顕彰した小説

梅妃か心見だ『長生殿』の楊貴妃像

であり、梅妃を崇高で清美な女性として描いた結果、楊貴妃は相對的に櫛正てヒステリックな悪女の面が強調して描かれている。圓頭に紹介した楊貴妃が玄宗と梅妃の密會の現場へ息荒く乗り込み、派手な痴話喧嘩を繰り広げる場面などは、正しくこの通行本「梅妃傳」において初めて設定された興味津々たるストーリーである。實は梅妃は史上に存在しない架空の理想の女性であった。『舊唐書』『新唐書』『資治通鑑』等にその名が見えねば、逆に梅妃がそれらの史書の出現以後に構想された事を推測させる。後にやや詳しく述べるが、しかし、梅妃は虚像の女性であつても、否むしろそれ故に、文人の好みのままに實によく出来た理想的の女性像であつた。その後に梅妃に言及し、或いは梅妃を主要人物として登場させる文學作品が陸續と現れることが、このことの有力な證明である。中でも明・吳世美的『驚鴻記』は、梅妃を主役に抉り、楊貴妃を脇役に格下げして描いた出色の南曲である。洪昇は『長生殿』の特に第十八・十九鉢の執筆について、これら「梅妃傳」「驚鴻記」に大きなヒントを得ていたであろう。

楊貴妃の實像が果してどの様なものであったか、今日では既に知る由もなく、我々はただ白居易「長恨歌」等の作品によつて類推するばかり無い。楊貴妃没後五十年に詠まれたとされる白居易「長恨歌」子らも、既に楊貴妃傳説の所産であつたのであり、かの白居易と、自らが楊貴妃を實見することは無かったのである。その意味で、今日に至るまで、我々は虚像と想像を繋い交ぜにして、兩端な美女の楊貴妃像を勝手に作り上げて來たとさえ言える。從來の楊貴妃作品では、白居易「長恨歌」の如く、楊貴妃を絶世の美女として抱える見方も主流としてあつたが、一方において、「虢國の悪女」楊貴妃を批判する作品も確かにその對極に存在した。「梅妃傳」はその典型であり、後に

紹介するこの作品において、我々は理想の美女梅妃とは對照的に、楊貴妃が嫉妬深い悪女として描かれている事を知る。圓頭の楊貴妃の派手な痴話喧嘩の描寫は、實にこの通行本「梅妃傳」に出揃しており、その他の「長恨歌(傳)」「太真外傳」等の作品には首見見えぬものである。

それでは、作者の洪昇は、何故このような悪名高い楊貴妃故事を「長生殿」中に取り込んだのであるらか。『長生殿』は作者も明言する通り、玄宗と楊貴妃の純粹の愛情を詠むことが主題であつたはずだが、その至上命題と、この梅妃に絡んだ悪女楊貴妃のエピソードとは相矛盾しないのであるらか。

本稿では、以上の經緯を念頭に置き、從來全く検討される事が無かつた『長生殿』第十八・十九節に描かれた異色の楊貴妃像を、特に梅妃故事との関連において考察してみたい。

二 「梅妃傳」について

この章では、梅妃故事を述べた「梅妃傳」の由來について考えてみる。いま、通行本「梅妃傳」の梗概は次の通りである。

梅妃は姓は江氏、名は采蘋、福建莆田の人である。開元中、この地へ使した高力士がその美貌を發見して長安に連れ歸り、梅妃は玄宗に侍して大いに寵幸を得る。梅妃は梅を好み、居宅の欄干に悉く梅を植え、また梅の花見の時分には夜遅くまで花下に佇んで梅花を玩賞した。そこで玄宗は彼女を「梅妃」と名づける。

時に天下太平であり、玄宗は兄弟と仲睦まじかった。御賜の櫻を諸王に頒布した際、漢王が梅妃の足を踏んで戯れたので、梅妃は急病と稱して竟た姿を見せなかつた。後に玄宗が梅妃と園茶の遊

びをした時、玄宗は諸王に「この者は梅妃だ。白玉笛も梅鶯舞も實にうまい。今回の園茶でも朕を負かした」と言つたので、梅妃はすかさず、「草木の戯れでは誤つて陛下に勝ちましたが、天下を調理する事にかけては妾は勝負にもなりません」と返して玄宗を大いに喜ばせる。

やがて楊貴妃が入内して來たが、おとなしい梅妃は智に長けた楊貴妃の敵ではなく、果て上陽東宮に遷される。後に玄宗は梅妃を忘れかね、戯馬を以て密かに華西園に召して薔薇を絞した。ところがその現場に、事情をかぎつけた楊貴妃がすゞい劍幕で乗り込んで来る。楊貴妃は御簾下の戯馬を見つけ、玄宗に詰め寄るが、玄宗は何とかその場を言い繕う。後に梅妃は「樓東賦」を詠んで園茶を述べる。また玄宗が下賜した眞珠に對して、梅妃は七絶一首を詠むが、玄宗はこれを更に樂府「一斛珠」に調作する。

やがて安祿山の亂が起り、楊貴妃は死ぬ。都に遷御した玄宗は必死に梅妃の行方を尋ね求めるが分らない。ある時、夢の御告げを得た玄宗が華清池の梅樹下を掘ると、簾下に刀痕のある屍が出土したので、玄宗は妃の禮を以て手篤くこれを葬つた。

本文一三五〇字を縮約した簡略なこの梗概からも、『長生殿』第十八・十九節における楊貴妃が玄宗と梅妃の密會現場に乗り込む場面、及びそれに付隨して、楊貴妃を嫉妬深い悪女として描く描き方が、實にこの通行本「梅妃傳」に出揃する事が明らかである。

さて、今日通行の「梅妃傳」の作者について、次に掲げる魯迅以前の明・清・民國の叢書類は、概ね「唐・曹鄧」とする。

明・顧 元慶 「顧氏文房小説」

明・顧 名 「五朝小説」

明・秦淮寓客 「秦淮寓客」

明・馮 夢龍 「情史類略」 卷十四

清・馬 優良 「龍威秘書」

清・王文誥他 「唐代叢書」 (唐人詩書)

民國・吳曾祺 「羅小説」

これら数百年に亘る作者名の誤記は、民國の魯迅に至って初めて明確に糾正された。即ち、「中國小説史略」に次の指摘がある。

「梅妃傳」一卷、亦た撰人無し。…宋に葉夢得と同姓と云ふは、則ち本文を撰せし者ならん。自ら葉夢得と同時と云ふは、則ち

(宋) 南渡前後の作なり。今本或ひは「唐・曹鄧卿」と題するも、亦た明人安りに之を増すなり。

明人の誰が一體何の目的で作者を「唐・曹鄧卿」に擬定したのか、具體的にはなお不詳であるが、魯迅の指摘はやはり重みがある。「梅妃傳」中の梅妃が異常に梅を嗜好した事や園茶の風習、更には愛せた梅妃が太った楊貴妃を罵る場面等から考えれば、やはりこれは唐人作とするよりは、宋人の筆に成ると考える方が現実的で妥當である。

そして、何よりも「梅妃傳」宋人作を決定づけるのは、魯迅も注目したその跋語である。

此の傳は萬卷宋嘉慶の家より得たり。大中二年七月書する所にして、字も亦た據好なり。…惜むらくは史に其の説を逸す。略ば脩潤を加へて跋語を曲補するは、其の實を没するを極るればなり。惟だ葉少蘋も余と與に之を得しも、後世の傳は或ひは此の本

に在らん。

この跋語によれば、大中二年(八四八)年の跋語がある原本「梅妃傳」は朱遠度が舊藏していたものであり、宋の大儒葉夢得(字は少蘋)の跋語にかかり、そして跋語の作者たる無名氏がかなりの修飾を加えて、今日の通行本に仕立てあげたものとなる。朱遠度に就いては「宋史」卷四三九、「東都事略」卷三八、「蘇平集」卷十二、「焦氏筆乘續集」卷七、「十國春秋」卷七五等に記述を有する。いま「十國春秋」の記事を引けば次の通りである。

朱遠度は青州の人なり。家に藏書多く、周覽略ば遍く、當時推して博學と爲し、繼して朱萬卷と曰ふ。…後に金陵に徙居し、高尙にして仕へず。

これらの記述を総合すれば、朱遠度は唐末十國の楚の人であり、後に金陵(南京)に移居して終生仕えなかつた民間の大藏書家であった。一方の葉夢得は、周知の如く「宋史」卷四四五に本傳を有する北宋南宋間を生きた著名な大文人である。(ただ葉夢得が「梅妃傳」に言及した記事は、まだ検索し得てしない。)

こうして、通行本「梅妃傳」の跋文を讀む限りでは、現行の「梅妃傳」の作者(闕名)と葉夢得とは南宋の同時代人であり、原本「梅妃傳」の著所藏者たる朱遠度は、それより約二百年も以前の唐末十國時代の南京の大藏書家と、うことになる。葉夢得は南宋の初めに建康(南京)の知事を拜命したので、ここに「梅妃傳」は或いはその時に収書されたものかも知れないが、確證に乏しい。

ところが、ここに通行本と異なる別本「梅妃傳」が存在する。全三六二字、通行本の全一三五〇字に比べて約四分の一の簡略な小説である。いま兩者を比較すれば、今日の通行本が増益した記事内容とし

- ① 梅賀の禮を諸王に頒布した際に、漢王が梅妃の履を踏んで戯れる事。
- ② やがて姫君深く楊貴妃の身上に上陽東宮に裏された梅妃だ、玄宗は密かに梨華西園で會うが、その密會の現場に楊貴妃が鳥居へ乗り込んで來る事、及び「連の痴話喧嘩の経緯」
- ③ 梅妃が司馬相如の「長門賦」に倣つて幽怨を詠んだ「楊東賦」の全文。
- 楊貴妃への荔枝使者到來の故事。
- ⑤ 安陵山亂後に長安に還御した玄宗が、賤賤金を出して梅妃の方を探し求めた事。
- ⑥ 文宗が夢で、騎下に刀痕の殘る梅妃の屍を探し當てた事。
- 等々の記述が挙げられる。更にこの原本には、末尾に分ち書きで、
此傳葉石林得之朱寔度家。乃唐大中二年七月所書。
- と記すが、通行本に見られる跋語や贊語は無い。以上の通行本、別本の「梅妃傳」を比べてみると、既に盧赤齋、趙克齊氏も推定する様に、この別本「梅妃傳」は通行本の藍本であり、通行本「梅妃傳」の作者が「略ぼ箇摘を加へて舊語を曲解」して今日の通行本に仕立てあげたものと考えられる。跋語によると「後世の傳は或ひは古の本に在りんか」とは、事實その通りになつたのだが、「梅妃傳」の改作者自身の高らかな矜持を示したものであらう。また、蘇洪勳氏が指摘する如く、宋・葉廷珪「海錄碎事」卷十下に引用する簡潔な「梅妃傳」が、この藍本「梅妃傳」の系統に屬するものと思われる。
- 以上を要するに、「梅妃傳」は唐大中間とされる原本の所在は分らないものの、宋人の大幅な修改を経て、梅妃と楊貴妃の興味溢れる種

々の逸話が四倍にも擴大された。この過程において、架空の理想たる清楚な梅妃像とは對照的で、姫君深くヒステリックな惡女の楊貴妃像が増幅強調されたものと思われる。そして、「梅妃傳」は明代以降の著書類において作者も「唐・曹鄉」に擬定され、今日に至る流行を見ているのである。

二 「梅妃傳」その他の行ひ

以上述べた様に、梅妃は全く架空で空想された理想の虚像であった。だが、實在する楊貴妃とは違つて、實像の制約にとらわれず、自由に想像された梅妃は、却つて後世の文人の歓迎する所となつた。いま、宋・元・明・清及び現代に至る文學作品・著述中において、梅妃に言及する曰ぼしいものを挙げれば、次の通りである。

南宋・闕名	「梅妃傳」
南宋・尤袤	『遂初堂書目』
元・白 横	『活潑市』
明・陶宗儀	『南村輿林錄』
明・吳世美	『驚夢記』
明・屠 隆	『深寒記』
明・周虎原	『西湖二集』
清・孫 郁	『天寶曲史』
清・褚人穐	『隋唐演義』
清・洪 昇	『長生殿』
清・唐 英	『長生殿補闕』
清・石 錦玉	『梅妃作賦』
現代・京劇	『貴妃醉酒』

「か」これらの作品における梅妃への言及の仕方につけ、「梅妃傳」「梅嬌記」「長生殿」を除いてコメントすれば、南宋・尤袤『遂初堂』『金華山』には、雜傳類に「梅妃傳」の書名を記録する。恐らくこれは闕名氏修復後の通行本「梅妃傳」を指すと思われる。元・白樛『梧桐雨』には、第二折の梨園弟子中に玉簫を吹く梅妃が登場するが、唱白は無い。明・陶宗儀『南村叢書新錄』は、卷二五の院本名目中に「梅妃」の記録を有する。明・施愚山『殊語記』では、第五齣に「楊妃麗嬌、梅妃怨」の語があるが、梅妃は登場しない。明・周清原『西湖』『樂』では、卷十一「寄梅花鬼闌西闌」中に、通行本「梅妃傳」に據りて西闌における梅妃と楊貴妃の葛藤を活寫する。清・褚人穫『隋唐演義』では、終盤第七九回以降に點綴された梅妃故事は、實は、吳世美『驚鴻記』をほとんどそのまま踏襲したものである。清・石編玉『梅妃作賦』は、上題古事記題材された梅妃が「楊東賦」を詠んで慨嘆する場面を仕組んだものである。そして最後に、人口に膾炙した現代京劇「貴妃醉酒」は、文宗との花見の約束を反故にされた楊貴妃が一人ヤケ酒を飲むところが設定だが、實は文宗は誰であろう梅妃の許へ行った事を知らず、楊貴妃の憤怒のボルテージは一層高まるのである。(その他、楊貴妃故事に取材した現代小説の多くも梅妃に言及するが、ここには縦述しない) 以上に挙げた十数例からも、通行本「梅妃傳」の作者が「後世の傳は或ひは此の本に在りんか」と自負した豫測が見事に的中して、梨園の理想像たる梅妃が後世の江湖の文人にいたく歎美された事が明らかとなる。

さて、中でも『長生殿』との関連において注目されるのは、明・吳世美『驚鴻記』である。『驚鴻記』が『長生殿』の先聲として注目すべき事につづれば、既に徐陵方氏に次の統一言及がある。

洪昇は實て『驚鴻記』について甚だ不満であった。しかし『驚鴻記』の「翠園好會」「七夕私盟」「梧桐長安」「驪兒戲紀」「父老遺留」「馬嵬移葬」諸は、「長生殿」の「翠園」「梧桐」「驪歌」「埋玉」「歌板」「歌舞」諸に類似して、多くお手本となつたであらう。『驚鴻記』が「仙客歸來」「幽明大會」の先聲である。

「驚鴻記」は「梅妃傳」に基づいて、楊貴妃のライバルの梅妃を主役(旦)に仕立てて明・萬曆刊の南曲である。その筋立ては次の三十九齣で構成されており、梅妃を旦に、楊貴妃を貼に仕立てて、梅妃の爲に大いに氣を吐いたものである。

第一齣	本傳提綱	第十六齣	梅妃宮怨
第二齣	梅亭私誓	第十七齣	洗兒賜錢
第三齣	相府稱願	第十八齣	花萼賣錢
第四齣	幽賞伏讐	第十九齣	梅妃遺賦
第五齣	君臣宴樂	第二十齣	楊妃晚粧
第六齣	壽邸恩情	第二十一齣	翠園好會
第七齣	花萼驚鴻	第二十二齣	祿山醉朝
第八齣	詭計陷梅	第二十三齣	七夕私盟
第九齣	楊妃入官	第二十四齣	祿山叛逆
第十齣	兩妃妬寵	第二十五齣	大駕幸蜀
第十一齣	權奸獻諛	第二十六齣	胡宴長安
第十二齣	興慶宣渠	第二十七齣	馬嵬殺紀
第十三齣	梅妃被貶	第二十八齣	梅妃投觀
第十四齣	梨園演樂	第二十九齣	父老遺留
第十五齣	學士醉彈	第三十齣	諸臣追罵

- | | | | |
|-------|------|-------|------|
| 第三十一齣 | 蜀道思妃 | 第三十六齣 | 入觀遇梅 |
| 第三十二齣 | 靈武破賊 | 第三十七齣 | 香囊起緝 |
| 第三十三齣 | 大駕還宮 | 第三十八齣 | 仙客蜀來 |
| 第三十四齣 | 南內思妃 | 第三十九齣 | 臨明大會 |

そして、その序「被説説」「被説説配絵」によれば、作者は次の如く、楊貴妃とは對照的だ、史上で全く無視された楊妃について、科舉試験で落第した自分の無念さを併せて、梅妃の爲に發憤し、切齒扼腕する」と一月餘り、遂に『楊貴妃』を完成させたものと云う。

才を負ひ、且に人士無く、尤も建安而下の諸詞賦を善くす。一日

蓋し扼腕するにと可能にして、『新編』⁽³⁾遂に成れり。(新編)

瀧陽の姫（安藤山の亂）、罪首は楊（貴妃）に歸り、而して采蘋（梅妃）は與らず。千秋萬祀、白郎の「長恨歌」を傳むべし。楊（貴妃）の美を歎頌するも、江（梅妃）は眞ち廣如たり。余謂へば、江氏（梅妃）は絶代の姿を以て、極端の主に通ふものにして、國を悞るの罪無し。正を守り死を俟つは、元始以來、女帝の君ふ所なり。

更に、「鷺鷺記」の大団圓たる第三十九回「醫明大會」の總結詩とも大の様に述べており、吳世美は梅紀の「鷺鷺記」が白居易「長恨歌」中に記載されない事を慨嘆する。

萬葉は更に是れ傾城の舞なるに

以上の事例から、「政治小説」「新・舊唐書」「政治短編」「太祖」

唐·杜甫	唐·白居易	唐·陳鴻	唐·元稹	唐·杜牧
〔麗人行〕	〔長恨歌〕	〔長恨歌傳〕	〔連昌宮詞〕	〔華清宮三十韻〕
〔高江頭〕				〔遇華清宮三絕句〕
				〔麗清宮和杜舍人〕
				〔唐·張祜〕

八世紀前半の中國唐朝に實在した楊貴妃については、同時代人の李白、杜甫を始めとして、今日の中國映書『楊貴妃』に至るまで、詩・小説・戯曲等々の様々なジャンルに亘って種々に語り継がれて來た。次に、楊貴妃に取材した頗著な作品例を幾つか舉げる。

八世紀前半の中國唐朝に實在した楊貴妃について、同時代人の李白、杜甫を始めとして、今日の中國映画『楊貴妃』に至るまで、詩・小説・戯曲等々の様々なジャンルに亘って種々に語り継がれて來た。次に、楊貴妃に取材した頗著な作品例を幾つか舉げる。

「外傳」等に等閑視された梅妃への、吳世美の狂おしい程の思い入れ、藝術は痛切に分るのであるが、惜しい哉、吳世美は梅妃の出自について根本から誤解している様に思われる。どうのうは、前章に述べた様に、通行本「梅妃傳」が序末初に出現したものであるとすれば、それ以前に成った「長恨歌（傳）」「新・舊唐書」「資治通鑑」「太眞外傳」等の諸書に「梅妃」の名が見えるべくも無いのである。恐らく吳世美は、明代當時の諸叢書中に「梅妃傳」の作者名を「唐・曹鄴」とするのをそのまま信じ込んで、かくも演説な藝術に駆られたものと察せられる。そして、『長恨歌』の作者洪昇もまた、明清の諸叢書の記述そのままに、「梅妃傳」唐・曹鄴作を全く疑つていなかつたものの様である。

唐・鄭 哲 「淮陽門詩」

唐・溫庭筠 「過華清宮」十一「韻」

その他、唐・王建、李商隱など多數。

五代・黃滔 「明皇題駕經馬嵬賦」

五代・樂史 「太真外傳」

南宋・歐陽文忠公集 「楊妃傳」

元・王伯成 「天寶遺事詩宮闈」

元・白 樂 「招綱記」

明・唐 麟 「採蘋記」

明・吳世美 「驚鴻記」

清・孫 郁 「天寶曲史」

清・褚人穫 「隋唐演義」

清・洪 昇 「長生殿」

「これらの簡略な一覽からも、盛唐中國の絶頂期に華々しく出現し、劇的に終焉した楊貴妃の故事が、當時はもとより後世の文人にとって、如何に連續として興味が盡きない恰好の題材であったかがよく分る。まさしく楊貴妃は盛唐の繁栄と没落を象徴的に物語る絶好の話題であった。ところが、この様な異常なまでの楊貴妃人氣とは裏腹に、眞の所、楊貴妃の眞の姿を當時において確かに傳えた記録は皆目無いのである。楊貴妃の御前に侍つた翰林學士李白の「清平調詞」は甚だ夢幻的で事實の反映に乏しい、「詩史」表現が期待される杜甫の「麗人行」では貧窮無名の杜甫は楊貴妃一族の華やかなバーレードを遠くから見物する一般大衆の一人に過ぎない。その他、「新・舊唐書」「資治通鑑」等の「史實」を語いても、基本的には當時に傳えられた楊貴妃傳説を忠實に記録しただけであり、記事の信憑性は樂史「太真外傳」

等とちがひはない。早い話が、楊貴妃の出生や歿死に關しても、正確には何一つ解明されていないのが實状である。

こうじう楊貴妃故事の演變史をめぐる情況にありて、前掲の楊貴妃に取材した作品を主題に關する要素別に分類してみると、文宗楊貴妃の純粹の愛情を強調する所謂稱賛派と、亡國の大亂を招いた責任を追求する所謂批判派とに大別することが可能である様に思う。(但しこれはあくまでも要素別の分類であり、全ての作品がこの様に截然と分れる譯ではない。同一作品が兩方の要素を兼ねる事も無論あるであらう。) その典型は、楊貴妃没後五十年に當る元和元(八〇六)年に早くも出現した。即ち、韓賛作品が白居易の「長恨歌」であり、批判作品が陳鴻の「長恨歌傳」であつたと筆者は考へる。「長恨歌」の主題をめくっては今日まで議論が沸騰しているが、私は一つの考え方として、白居易の「長恨歌」はあくまで楊貴妃の愛情たついて稱賛する立場を貰いたいし、『白氏文集』卷十二に附載する陳鴻の「長恨歌傳」は、むしろ冷静且つ客觀的に楊貴妃を批判する見方が顯著であつたと思ふのである。いま、「長恨歌」はさておき、陳鴻「長恨歌傳」について見ると、その根據となるべき楊貴妃批評は、次の様である。

其の客を詠じし、其の詞を巧にし、歌舞談笑、婉麗便佞、以て上之心に中づ。

徒に殊號尤態の是を致すに非す。蓋し才智明慧、善巧便佞、意に先んじて旨を希みて、形容すべからむる者有ればなり。

玉妃方に妻ぬ。請ひ、少く之を待て。

意とする者は、但だ其の事に感ずるのみならず、亦た尤物を感らし、亂情を望ぎ、將來に垂れんと欲する者なり。

そして、楊貴妃故事が早や過去の傳聞となりつづつあつた中晚唐の時

人間においては、陳鴻の如く、そこには「傾國」の教訓を讀み取る事は士大夫としてむしろ當然でありたであらう。昔の白居易ではえ、新樂府「李夫人」においては、「嬖惑に鑑みるなり」と題注して、

生も亦た惑ひ、死も亦た惑ひ

尤物は人を惑はし 忘れ得ず

人は木石に非ざれば皆情有り

如かず 傾城の色に選はざらん

と述べる。微妙な言い回しながら、白居易はここで「尤物」＝「傾城の美女」たる楊貴妃へ「惑ひ」成めを讀んでいるのである。

してみれば、玄宗楊貴妃の永遠不變の愛情を歌い上げた白居易の「長恨歌」は、楊貴妃故事演變史においては、むしろ例外的に異色であつたと言えるであらう。しかし、それは白居易の「詩に深く、情に多き」詩才によつて巧みに藝術を施され、楊貴妃没後五十年において、その後に出現する楊貴妃取材作品の一典型を形成することになる。白居易自身も當時における「長恨歌」の流行を目睹しているが、その後に出現した詩・小説・戲曲等のいずれを取りつても、また日本文學への影響においても、およそ楊貴妃に取材した作品で白居易「長恨歌」の影響を受けないものは無かつたと言つても過言ではない。

考えてみれば、白居易「長恨歌」の主題については今日も諸説紛々としているが、少なくとも讀者たる私が素直に感動を覚えるのは、やはり楊貴妃玄宗の切々たる愛情表現の部分である。當時或いはその後において「長恨歌」を愛唱した人々もそうであつたであらう。更に言えば、元・白樺「梧桐雨」についても基本的に同様である。清・洪昇「長生殿」についても然りである。「長生殿」の主題は玄宗・楊貴妃間の愛情であることは、次の第一回「傳概」の表現から確認する

事ができる。

【通江社】今古の情場、問々誰が眞心到底ならん。但だ果して精誠の致せざる有らば、終に遠理を成さんのみ。吾情の義を取りて官徵を織し、太眞外傳に借りて新詞を織するは、情なるのみ。今日「長生殿」が中國清朝を代表する戲曲として、また楊貴妃故事を集成大成した文學作品として、白居易「長恨歌」や白樺「梧桐雨」と並んで稱賛されるのも、その最大の魅力は恐らくこの文宗との純粹の情愛を天上で再會させる事で實感した點にあるであらう。決して「長恨歌傳」や「梅妃傳」の如く、楊貴妃を「傾國の悪女」として辛辣に批判する點に在るのではない。

五 「長生殿」と梅妃故事

洪昇は「長生殿」撰述の基本方針として、「頌詞」中に
史に楊妃を載するは汚亂の事多し。手の此の國を撰するは、止だ
白居易「長恨歌」・陳鴻「長恨歌傳」を模じてそれを爲せり。而して中間點架の處は、多く天寶遺事・楊妃全傳より采れり。若し一たび確跡に據らば、風教を妨ぐるを恐れ、絶えて闇入せしめず。覽者以て子の志を知る有らん也。

と述べる。ここにば、從來の種々雜多な楊貴妃傳説のうち、洪昇が「汚亂の事」や「穢跡に據る」故事を努めて排除し、専ら白居易「長恨歌」や陳鴻「長恨歌傳」を模じて「長生殿」を撰述した事が述べられる。洪昇は「長生殿」の「白居」にも

凡そ史家の體諧は、概ね創りて書せす。

と述べており、洪昇が楊貴妃故事の醜穢な部分を刪除して、ひたすら楊貴妃の純愛を描こうとした事が明らかである。ただ、洪昇が「ここに

言及する「長恨歌」「長恨歌傳」「天寶遺事」「楊妃全傳」については、

なお幾分の検討を要する。このうち、「中間に點染」したといふ「天寶遺事」「楊妃全傳」については、固有作品名ではなく、「開元天寶遺事」「昭皇雜錄」「楊太真外傳」等を含む一般總稱であろうと思われる。この問題とすべきは、洪昇が「長生殿」楊貴妃故事の主要材源として舉げる白居易「長恨歌」・陳鴻「長恨歌傳」のうち、とりわけ後者である。即ち、前述の如く、「長恨歌傳」には多くの楊貴妃への貶謫を含み、必ずしも楊貴妃寵愛とばかりはいかないからである。たゞ『白氏文集』卷十一には白居易「長恨歌」と共に陳鴻「長恨歌傳」が當初から併録されており、この兩者が一體となつて楊貴妃傳説の形成と展開に與つて力があったのは疑うべくもない事實である。洪昇がここで「長恨歌」「長恨歌傳」を併稱するのも、或いはその様な歴史事實を階層したまでの」とかる知れない。

してみれば、この「長生殿」例言中に洪昇が標榜する「長恨歌」

「長恨歌傳」とは、單に「長生殿」執筆の大原則を示したまでであつて、實際は洪昇は、當然ながらその他諸々の楊貴妃故事に取材した作品・記錄類を取捨選擇して、「長生殿」五十鈞を完成させた事が明らかである。

そして、その難多な楊貴妃故事作品として、南宋・國名作の通行本「楊妃傳」も例外では無かつた。ところが、首頭に述べた「長生殿」第十八・十九節中の玄宗楊妃の在會現場に楊貴妃が荒々しく乗り込む赤裸々な場面は、明らかに通行本「楊妃傳」に出揃するからである。また「長生殿」自序には

南曲「雙鸞鵠」の一記は未だ様に渉るを免れず。
もあり、洪昇が、「楊妃傳」を演繹した「楊妃記」を確かに讀んで、

楊妃から見た「長生殿」の楊貴妃像

た事が、はからずも明らかとなる。

それでは、「長生殿」中に點綴されたこれらの楊妃故事は、「長生殿」が忌み嫌つた「續跡」には相當しないのであらうか。實はこのことは大きな問題として、「長生殿」成立の當初から議論があつた。というものは、「長生殿」例言に次の記述があり、「長生殿」における楊妃故事は、韓國夫人故事と並んで、とかく問題視された事情があるからである。

今「長生殿」世に行はるに、伶人繁長にして演じ難きに苦しみ、竟に舊章の竟に至りて節改を加え、開目者て廢す。吳子（山）^注、之を賣り、「應感十四種」に效ひて「十八折を更定し」而して虢國、梅妃を以て別ちて饒感兩處と爲すは、確當にして不易なり。^注…近ごろ唱演家の改換するに、必ず從々からざる者有り。虢國承寵、楊妃待争の一段を増すが如きは、三家村婦の醜態を作し、既に蘿藉を失し、尤も觀るに耐えず。

これに據れば、友人の吳山が更定した「十八折本」『長生殿』（今日の定本は五十折）とは別に、韓國夫人と楊妃を「應感」として別立ての「兩戲」に仕立てたもの様である。唱演された韓國夫人・楊妃故事に關する改定本は、醜態の極みで見られたものではないという。ここに述べる「楊妃全傳の一段」とは、「長生殿」第十八夜終、十九深闇の兩處に關わるものであろう。洪昇自身が記したこの例言の記述から、友人の吳山が「長生殿」における楊妃故事を別本の「應感」として扱つた事が明白となる。既に本稿第一、三章において綴述した通り、「楊妃傳」「雙鸞鵠」につながる一連の楊妃故事中に現れる楊貴妃は、明らかに意圖的に痴症の「惡女」として描かれている。楊貴妃の派手な痴語喧嘩は讀者の好奇心をそそることはありても、やはり白居

易「長恨歌」に典型化されたロマン達れる楊貴妃には相應しくないであらう。同様に、楊國忠との近親關係を云々される虢國夫人の故事も、杜甫「麗人行」詩に既に見られる如く、やはり醜聞故事である。その意味で、親友の吳山が「長生殿」の選本を作った際に、この虢國・楊妃にからむ兩處を「醜聞」として別本立てで編成し直したのは、知音の士の賢明な見識であったと言わなければならぬ。(但し、この二十八折「長生殿」教訓本、及び別本の「虢國」「楊妃」兩處とも、今日その傳本を見る」とはできない。)

以上の事から考えれば、洪昇が「長生殿」例言に櫻痴する「若し」一たび醜跡に涉らば、風教を妨ぐるを恐れて絶えて聞入せず」という執筆の基本方針は容認するとしても、實のところは親友の吳山も認める様に、少なくとも「長生殿」中の虢國・楊妃に觸れる部分においてはやはり「醜聞」の幾種を拂拭し難かつたところのが實情ではなかつたか。

六 まとめ

この章では、まとめとして、「長生殿」第十八・十九節に楊妃故事を點綴した事の文學的効果、及び洪昇の執筆意圖について、もう一度考えてみたい。『長生殿』第十九「疑問」節に、吳山注と思われる次の眉注がある。

客有り、嘗て論す。此の國の虢國・楊妃兩者の寵を争ふは、皆未だ場に當つて拔田せず。關西顯ざるに近く、挑戦において楊・虢の相争ふを加へ、然る後に放ち歸らしめんと欲すればなり。〔疑問〕折中、壁を破りて出づる時、楊妃場を蹴りて走り下り、近いる演家の楊妃に扮するに、櫻内に默坐する者有り。

この注によれば、「長生殿」中の虢國夫人や楊妃に觸れる醜聞を詠んだ詩(筆者注・第五節「秋露」～第六節「秋夕」、第十八節「夜怨」～第十九節「疑問」)は、當時話に演出上の様々な醜聞があり、注者はその扮演に強い難色を示している様に見受けられる。しかもこの眉注の口調は、前章に述べた「長生殿」例言に言ふ、

近じる唱演家の改換するに、必ず從すべからむ者有り。虢國承誦、『楊妃急等』の一節を増すが如きば、三家村婦の醜聞を作り、既に蘿蔦を失し、尤も觀るに耐えず。

と正しく軌を一にする。そして、これらの方の表現内容から、「長生殿」成立の當初から既に、「長生殿」中に點綴された虢國夫人・楊妃故事の是非をめぐりて、とかくの議論が展開されて來た事が分る。いま、楊妃から見た「長生殿」の楊貴妃像について考察してみようとする時、洪昇或いはその親友によるこれら一連の發言は、實に重い内容を持つ。即ち、これらの發言は、「長生殿」における楊妃故事が實は「長生殿」の主題である趙高とは相容れない異質の「醜聞に涉」りかねない不純の要素を具有している事を自から露呈して、いるからである。事程左様に「長生殿」における第十八・十九節に點綴された楊妃故事は、虢國夫人故事と並んで、如何にも興味本位で唐突であり、全體にそぐわない異和感を免れ得ないものであった。

それでは作者の洪昇は、この様な異質で活潑感のある楊妃故事に描かれた楊貴妃像を、何故に「長生殿」中に點綴したのであらうか。楊貴妃故事の「醜聞に涉る」部分を削除するという「長生殿」の執筆方針からすれば、虢國夫人故事と共に楊妃故事も削除リスト中に入つても良かったのではあるまいか。

今、この疑問について、作者本人でない筆者には容易に解答を出

かねるが、参考までに、幾つかの意見を提出してみる。

(1) 洪昇は通行本「梅妃傳」の作者を唐・曹鄴とする明清時代の叢書に見られる誤った認識を、どうやらそのまま踏襲していたらしい。第一章で述べた如く、「梅妃傳」は南宋人の恣意的な改作によるものであり、そのために楊貴妃像が意図的に貶悪された認識を洪昇が持つていれば、或いは「長生殿」第十八・十九節の楊貴妃描寫は少し變ったものになっていたかも知れない。

(1) 通行本「梅妃傳」或いは「舊唐記」中に描かれた楊貴妃像を、洪昇はさまで「活潑」とは感じなかつたか。どういう描寫を「活潑」と認識するか、今日も「張愛、論議が眞しい」(因に二十一「魔君」詩は十分に要義である)。通行本「梅妃傳」に描かれた楊貴妃の直情徑行のヒステリックな行動を、善意に解釈すれば、玄宗の自分への寵愛を必死に纏め留めようとする楊貴妃の健氣な止むに止まれぬ純情な行動であるとの解釈も成り立たぬことは無い。これも著者自身で無ければ分らぬ事であるが、洪昇が「梅妃傳」中の楊貴妃の行動描寫について、さほど「活潑」性を認めていなかつたとすれば、この故事を「長生殿」中に點綴しても何等異和感は無かつたはずである。

(1) 或いは全く洪昇の不注意に據るか。

「活潑」とも述べる通り、洪昇は「長生殿」の構想執筆に當つて、白居易「長恨歌」、陳鴻「長恨歌傳」を中核として、その他「楊太真外傳」を始めとして著々と多大な作品に述べられる楊貴妃故事を取捨選擇して「長生殿」を完成させている。その大原則としては玄宗楊貴妃の「體情」を標榜するものの、やはり幾らかの「活潑」部分の混入を避けられなかつたものであらうか。特にこの場合の虢國夫人・梅妃故事は歴史傳統があつて實に興味深い文學的虛構が施されており、洪昇

自身、親友の吳山に指摘されるまで、「長生殿」における梅妃故事に溯源する楊貴妃像の異質感に氣付いていなかつたのではあるまいか。以上は、いすれも感測に基づくものであり、著者の發言による裏付けを得た評ではない。しかしながら、前述の親友の吳山による評價は却つて洪昇の代辯として貴重であり、右の幾つかの臆斷が全ては當らないとしても、「長生殿」中に梅妃故事を詠んだ第十八・十九節の異質性については確證を得たと言えるのではないか。

今日、「長生殿」の評價については、「長恨歌」「梧桐雨」の後を承けて玄宗楊貴妃の純愛を描いたものとして高い評價を受けている。清・朱彝尊も「長生殿」序において、「¹」

其の用意は一に太眞の體を洗へり。

と激賞する程である。この評は「長生殿」全體の評價としては肯定できる。しかしながら、「長生殿」には成立當初から梅妃、虢國夫人に絡んで、とかくの「體情」を云々される瑕疵を含んでいたこともまた一方の事實であった様に私には思われる。

そして最後に、梅妃故事に伴う楊貴妃像の變化について、「長生殿」全體の流れから捉え直してみた。

周知の様に、「長生殿」全五十節は、楊貴妃生前の榮華を描いた前半二十五節と、その後の天官世界を描いた後半二十五節とに二分される。就中後半二十五節は、綠女巫の取りなしで玄宗・楊貴妃を中秋明月の夜に月の宮殿で再會させるなど、「長恨歌」や「梧桐雨」に描かれた夢幻の世界を更に發展昇華して圓満に導いている。

この中で、上述の様に梅妃故事は前半部分に於いて述べられるだけであり、後半には全く見えない。つまり、梅妃故事に伴う楊貴妃像の變化は、専ら梅妃に絡んで生前の現實の楊貴妃について描寫されたも

- (15) 現代京劇「貴妃醉酒」の原本に、唐・李商隱『鵝鴨樂曲譜』補遺卷四所收「醉鴨記」がある。
- (16) 欲昇官經試「驚鴻記」很不滿意。但是「驚鴻記」的「翠翹社會」「七夕私闈」「胡其長安」「風塵飛記」「父老傳説」「風塵怨歌」對「長生謡」的「深閨」「宿昔」「驚鴻」「埋玉」「翠翹」「改革」、應該是多少有過信鑑作用的。「驚鴻記」全劇以「仙客歸來」「醉歌大會」作結束，也是「長生謡」的先聲。
- 以上は「長生謡」校注本、徐錦方氏前言。また同氏「洪昇和他的『長生謡』」（同氏『戲曲雜記』上册古與文學出版社、一九五六年）。なお、王永建『洪昇和長生謡』（上海古籍出版社、一九八一年）にも同様の指摘がある。
- (17) 描寫「校注驚鴻記」一、二、三」（『文學研究』九〇・九一・九二・九三文革部、一九九三・九四・九五年），及び「周氏『驚鴻記』」に描かれた唐詩の梅記」（『周氏文集』六、香港、明治書院、一九九三年）参照。
- (18) 楊德輝「驚鴻記序」に「觀其曲，終似爲唐詩氣而作」とある。前稿「校注驚鴻記」三」參照。
- (19) 「驚鴻記」者、余友人仲子所爲、…仲子雅氣也、目無人士、尤善建安而下諸詞賦。一日爲制科所憲，同僚謂其曰……蓋拓腕月餘，而「驚鴻記」遂成。（前稿「校注驚鴻記」一」參照。）
- (20) 楊鴻之續（李嘉言著）、「詩言詩語」（唐記），而宋蘇軾（唐記）不與。千秋萬代、咏白居（居易）「長恨歌」、歐陽修（唐記）美、江（唐記）則蔑如也。余謂、江氏（唐記）以經代之姿、遺續之主，而無復國之罪。守正俟死、元始以來、女伴所不矣。（前稿「校注驚鴻記」一」參照。）
- (21) 前稿「校注驚鴻記」一」參照。
- (22) 主要作品のみ。王建・李商隱その他の開運作品については『全唐詩』、また清・胡鳳丹編『馬嵬志』（華文出版社、一九六七年、據光緒三年版影印出版。また江蘇古籍出版社、一九九〇年、原刊微校點出版）參照。
- (23) 現代京劇「貴妃醉酒」の原本に、唐・李商隱『鵝鴨樂曲譜』補遺卷四所收「醉鴨記」がある。
- (24) 欲昇官經試「驚鴻記」很不滿意。但是「驚鴻記」的「翠翹社會」「七夕私闈」「胡其長安」「風塵飛記」「父老傳説」「風塵怨歌」對「長生謡」的「深閨」「宿昔」「驚鴻」「埋玉」「翠翹」「改革」、應該是多少有過信鑑作用的。「驚鴻記」全劇以「仙客歸來」「醉歌大會」作結束，也是「長生謡」的先聲。
- 以上は「長生謡」校注本、徐錦方氏前言。また同氏「洪昇和他的『長生謡』」（同氏『戲曲雜記』上册古與文學出版社、一九五六年）。なお、王永建『洪昇和長生謡』（上海古籍出版社、一九八一年）にも同様の指摘がある。
- (25) 描寫「校注驚鴻記」一、二、三」（『文學研究』九〇・九一・九二・九三文革部、一九九三・九四・九五年），及び「周氏『驚鴻記』」に描かれた唐詩の梅記」（『周氏文集』六、香港、明治書院、一九九三年）参照。
- (26) 非徒殊絕尤頗致是、蓋才智明慧、善巧便便、先意希旨、有不可形容者。
- (27) 五紀方義。請少參之。
- 白居易「長恨歌」では、「漢家の天子の使」が來た事を知った楊貴妃が、あわてて「花冠を整えず、裳を下りて來り」、すぐさま使いの方士に會おうとする。これに對し、陳鴻「長恨歌傳」では、この様に、楊貴妃との面會を求めた方士は、門前で一晩待たされ、翌朝おもむろに對面するに及ぶのである。些事ながら、ここにも陳鴻の楊貴妃に対する冷徹な批評眼が現れていると筆者は考える。
- (28) 意者不但感其事、亦欲感尤物、空亂體、垂於將來者也。
- (29) 生亦惑、死亦惑、尤物惑人忘不得。
- 人非木石皆有情、不如不遺傾城色。
- (30) 照天深於詩、多於情者也。
- (31) 白居易「與元九書」に「拔大誇曰、我獨得白學士長恨歌、蓋同他歌哉。…諸妓見僕來、指面相顧曰、此是秦中吟、長恨歌主耳。」とある。
- (32) 日本書への影響については、以下の論著を参照。

- 遠藤寅夫『長恨歌研究』(建設社、昭和九年)
- 水野平次『白樂天と日本文學』(日黒書店、昭和五年)、大黒堂書店、昭和五年、(森井寅和補訂)、金子義一著『平安時代文學と白氏文集』(原版昭和三十一年)。
- 近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』(昭和書院、昭和五六年)。
- (31) 但し、『琵琶行』については、安藤田の自己「只是我與黃記有舊私本」(卷子)、「摺子黃記」等「唐朝天下、摺足我平生願足。」(第1折)とあり、その「摺子、摺實を環紙として届けた者も多」。筆者は、「」の部分は「天寶遺事諸官房」などの通俗作品にまで見られる低俗で獨創的な描寫が混入したものと考える。
- (32) 「琵琶行」古今流傳、何誰個眞心到底? 但果有精誠不散、終成連理。…吾嘗取樂宮樂、借太眞外傳諸新詞、情而即。
- (33) 宋敏叔記多有誤事。予異此頃、止按田所傳「長恨歌」、陳鴻「長恨歌傳」爲之。而中間點染處、多采天寶遺事、摺記全傳。若一抄襲時、恐抄風教、絕不闇入、覽者有以知子之志也。
- (34) 凡史家載語、橫剖不書。
- (35) 南田『種說』一起、未免涉譏。
- (36) 名は誠一、字は吳山、錢塘人。『國朝杭州府志』(續修志)、「杭州府志」卷九四等に傳がある。京洛傳『洪武年譜』(上巻古籍出版社、一九七九年)1101頁参照。同書118頁に據れば、洪昇は吳誠一より三歳年長である。
- (37) 今「長生歌」行世、令人苦于繁長難演、竟爲俗聲妄加節改、顯目奪聽。吳子愬之、故「墨客十四種」更定二十八折、而以樂圖、海記別爲續成兩編、確當不易。
- (38) 近唱演家改奏、有必不可從者。如增「我國承禪」、「摺記急急」、一改、作三絃石鼓體、既失蘊藏、尤不耐聽。
- (39) 有客嘗論、此唐詩體、桂冠詞體者也、皆未當與林出。顧曰近於不

顯、欲於排場、加場、國相爭、然後放歸。「新編」折中、破壁而出時、
梅記譜稿定下。近演家有扮梅記默坐漫内者。

(40) 朱雲東の「長生歌」(之)に「其用意、一洗太眞傳」と。但、この序は朱雲東の「詩書合集」中に收めなし。

(41) 古川良和「わらーいの『長生歌』の世界」(『』、日本と中國を考える)、鶴奈川大、一九八九年)参照。

(42) 「昭治通鑑」卷二一五、および「太眞外傳」卷上参照。

(*) 本稿を成すに當りて、清水茂、入谷仙介兩先生から貴重な御助言を賜った。記して感謝申し上げる。